

私は、立命館守山高等学校の創立に携わった一人で

す

もありました。

*

語り手 北田正知（初代事務長） 聞き手 関口陽彩

*

学生時代

高校では理系の学校に行きたかったんだけど、いろいろな事情があつて、文系の法学部に入學した。大学に入つてみたら、法学部の中の五、六割は、いわゆる「理系崩れ」みたいな人が多くてね。友達も、そんな感じの人が多かった。考えてみたら、法学部で学ぶ学問体系は、物事を理屈や論理で考えていくでしょ。言葉の概念を、aとかbとかcに置き換えて、「集合」の概念で、aはbを含むから」みたいなことを、平気でやるじゃないですか。そういう意味では、法学部で鍛えられた基本つて、論理学みたいなもんだったかな、と思う。んで、そういう点では、すぐ役に立ったかなという気はします。大学の職員になつてからは、学生部門が長く、その後は、法人の人事部門や、大学の研究部門でも仕事もしていた。

—研究部門では、どんな仕事をされていたのですか。

大学には、大学独自の研究費と文部科学省の科学研究費、それから外部資金による研究費などがある。それらの獲得や、共同研究などがあつて、これらを統括するのが研究部門です。

例えば、科学研究費に申請をして、採択をされると研究費をもらえるんですよ。そういう申請の仕事に関わるとかね。それから、特許申請（知的財産権の申請）や、その管理とかね、そんな仕事をしていたこと

学校創りの仕組みと立命館附属校設立の背景

—立命館守山高等学校の学校創りに携わったと聞きました。まず、学校はどういう手順で創られるのですか。

学校を創るには、設置者（学校法人）が、土地と建物、教員方を用意して、カリキュラムも準備する必要がある。授業体制や学校運営体制を整えたうえで、「こんな学校を、定員なんぼで創りたい」と設置申請をするんやね。それが、然るべき機関で審議され、認可されて、初めて学校を創ることができる。認可前でも、了解を得て「認可申請中」としてポスターや資料を作成することはあるけれど、正式に許可を受けてから、入試募集をし、入学準備をやつて、ようやく新しい学校の入学者を迎えることができるという仕組みになっています。

—立命館が附属校を創るとなつた背景を教えてください。

この参考資料を見てください。

—（資料をいただく）ありがとうございます。

この資料は、文部科学省が発行している資料です。一九九〇年代くらいまでは、どんどん一八歳人口は増えていました。でも、それ以降は減っていることが分かるよね。一方で、大学進学率は、当初は二〇%くらいしかなかったのが、三五%、四〇%、五〇%と増えていく。都市部では、進学率が五〇%を超えてくるので、しばらくは大学に入学してくる学生数は急激には減らない。ただ、ある年度を境に、確実に減つていく。そういう状況の中で、文部科学省は、国立大学の収容定員を増やし

ても、将来的には規模が縮小してしまうと判断した。だから、その間の「つなぎ」を私学に求めたわけやね。私学は、一八歳人口が増えていく間は、臨時的に大学の定員を増やすことを引き受ける。でも、ある程度、人口が落ち着いてくると、「臨時定員だから元に戻せ」ということになる。ただ、私学側からすれば、すでに大学の規模を拡大し、投資もしているから、定員を減らすと、経営面で課題を抱えることになる。そこで、増えた分の定員を恒常定員化してほしいという話になる。結果として、臨時定員で増えた分の定員の一部は、恒常定員化が認められた。大学側の財政的には、オッケーなんやけれども、大学の数や収容定員が増えるとな、次に問題になるのが「入試」なんですよ。学生定員が増えると、試験でたくさん合格者を出す必要が出てくる。偏差値が高い、競争力のある大学は持ちこたえられても、一般入試での偏差値が下がってくる。そうになると、偏差値競争が熾烈になって、受かったけど、その大学には行かないという受験生も出てくるし、偏差値が下がると、ランクの低い大学だと世の中に言われてしまう。元々、学部、学生数が少ない大学は、そんなに影響がないのかもしれないけれども、大学や学部の規模が大きいとこうした問題が顕在化してくる。そこで、一般入試とは違う学校推薦型選抜や特別入試と言われる枠を増やす。その一つの手段として、附属校を増やして、附属高校から大学に入ってくる生徒数を増やす。これらのような入学生確保政策によって、大学全体の学生規模は維持しながら、一般入試の募集定員の枠を増やすことなく、偏差値を下げない、という戦略を取りました。もう一つは、学力問題です。大学で学ぶためには、基礎的な学力をちゃんと身につけている人が欲しいということがあります。附属校の特別入試や指定校入試は大学が設定した基準はあるのですが、それでも生徒が所属する学校にゆだねることにな

る。附属校なら自ら教育実践するので、大学教育にふさわしい基礎学力を身につけた、自分で学びを深められる生徒を確保できる、という狙いもありました。

―立命館が附属校を創るには、そのような背景があったんですね。では、立命館守山高等学校の創立の背景を教えてください。

立命館宇治高等学校や立命館慶祥高等学校の設立は、私立高校からの設置者移管によって実現してきました。一方で、新しい附属校を創るにあたって、私学の学校のだけではなく、公立の学校もその対象にできないかと考えるようになりました。その時に、守山市が手を挙げてくださり、設置者を移管することで附属校化が可能になりました。他の学校も移管に手を挙げていましたが、守山市が、しっかりと支援と協力をしてくださったことで、立命館守山高等学校として創立することができました。

また、立命館大学びわこ・くさつキャンパス（立命館大学衣笠キャンパスから理工学部と経済学部、経営学部を移転）の設置に際して、滋賀県が土地を提供して大学を誘致した経緯もあり、学校法人立命館と滋賀県との関係がある程度ありました。そういう背景もあって、守山女子高等学校なら移管できるのではないかと判断しました。

―移管にあたって、心掛けたことはありますか。

移管時の生徒と保護者の方への説明は、責任を持って守山市に尽力いただくこと。そして、移管後の学校のあり方は、立命館より説明することとしました。移管後の学校のあり方は、「学校は一つ、生徒も一つ」ということでした。

もう一つは、守山女子高等学校の学校教育を、途中で中断することがないようにすることでした。守山女子高等学校は、立命館守山高等学校

の普通科とは違って、被服科・商業科・英語科があります。そのため、移管後の立命館守山高等学校は、初めは、被服科・商業科・英語科と普通科を併せ持つ学校としてスタートしました。ただ、普通科の国語や数学・理科・社会などを教える先生が守山女子高等学校には少なかった。そこで、新しく入学してくる立命館守山高等学校の生徒については、他の附属校からの移籍や新規採用によって新しい先生方を確保しました。一方で、守山女子高等学校に通っていた二年生、三年生は、これまで教えていた先生に継続して授業を教えてもらうようにしていました。普通科の科目で共通対応が出来る科目は、双方の先生方の相互協力もありましたが、教員室に先生が入りきれず、教員室が学校に二つある状態になりました。

— そうだったんですね。教育課程が違うと聞きましたが、学校行事はどうされていたのですか。

学校行事や生徒会活動、式典などは、一つの学校としてやることにしました。

制服をどうするかは、特に大きな決断でした。「新しい学校になったのだから、新しい制服に変更するべきだ」という意見もありました。けれども、やっぱり守山女子高等学校に通っていた二年生、三年生の今いる生徒の気持ちや思いを大事にしたいと考えて、制服のデザインは、守山女子高等学校のものをそのまま残しました。守山女子高等学校は女子校だったので、男子生徒には、似たようなデザインになるようにブレザーとズボンを作りました。また、リボンは立命館が費用を負担し、エンジ色のリボンを新たに配布し統一しました。

並行して、新キャンパスの改修・設計もしました。平安女学院大学が高槻キャンパスへ移転をしたため空き地になっていた守山市三宅町（現

在の立命館守山高等学校の敷地）を、守山市・平安女学院・立命館の三者によって、立命館が取得しました。二〇〇六年四月、勝部校舎で立命館守山高等学校を開校すると同時に、立命館守山中学校・高等学校のキャンパスとして三宅町キャンパスを整備する準備を並行して行いました。立命館守山中学校の設置申請を進めながら、中学校の校舎の改修・設計と、高等学校の新しい校舎、体育館の新設・設計なども行いました。もともと三宅町キャンパスにあった建物は、近江兄弟者学園の創立者で建築家でもあるウイリアム・ヴォーリズの流れをくむヴォーリズ設計事務所の手によるもので、同志社大学や関西学院大学、神戸女学院など共通する落ち着いた雰囲気がありました。そのため、これらの建物はできるだけ残して、再活用することにしました。中学と高校の理科実験室（物理・化学・生物）については、高校のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）への申請と、理数系素養を重視した学校の特色を踏まえて、施設内容と什器備品を確保しました。中高共有できるように、渡り廊下も創りました。

この大変な仕事を成し遂げることができたのは、総合学園としての立命館の力があつたからだと思います。学校移管や設置申請の実務に精通したスタッフ、一級建築士でもある施設部門のスタッフ、自らも学校移転や移管を経験し、生徒の募集も熟知している附属校教諭の面々。そうした人たちの献身的な努力と頑張りがありました。

※なお、守山女子高等学校が立命館守山高等学校に変わった時の勝部校舎の土地や建物については、現在の三宅町キャンパスに移転後に守山市に返還することになった。現在は守山市の施設となり、かつての旧守山女子高等学校の正門にあった門扉と記念碑がある。

移管に関しては、大人の心配や苦勞とは別に、生徒たちが生き生きとした学校生活を送っていて、その柔軟性や適応性にとっても感心させられました。

―お話にあった移管の背景について、今の立命館守山高等学校にいる先生方は知っておられるんですか。

いや、あんまり知らないと思う。移管に関わった数名と、守山女子高等学校から立命館守山高等学校に採用された数人の先生しかいないと思いますけどね。その多くはすでに定年退職していますが、今も数名の先生が、働いていらつしやると思います。

*

地域との関わり

学校のキャンパスを創るにあたって、良かったことは、ホールを作らなくても済んだことですかね。学校のすぐ横に守山市民ホールがあり、でっかいステージもあるし、音響や照明設備もきちんとしている。そこで、ダメ元で、入学式や卒業式、文化祭で守山市民ホールを使うことはできないかと相談すると、快く「オッケー」と言ってもらえた。これは本当にありがたかったですね。あとは、学校のグラウンドづくりです。あそこも元々は田んぼでした。最初は学校にグラウンドがなかったの

で、体育祭をやる場所がなくて、守山市民グラウンドでやったこともありました。グラウンドを作るには、田んぼの地主さんに「売って欲しい」ってお願いする必要がある。その時は、守山市が協力してくださって、地権者の中で交渉団を作り、話を進めることができました。そういう話を進めることができたのは、地域の方々の理解と支援があったからです。勝部の校舎の時から、地域の方の田んぼを借りて、高校一年生が

田植えや生物研究などをしてきました。地域の方々との関係を大切にすることは、学校を創った当初からコンセプトとしてありました。

教育そのものは公のもの

立命館は私学なんだけれども、基本は、「公教育」だと思っているんですよ。何がなんでも私学がいいんだ、という風には思っていません。教育は、国がやっても、自治体がやっても、私学がやっても、教育そのものは公的なものなんですよ。私学だからといって、勝手な教育ができるかっていうとそんなわけじゃないでしょ。教育基本法もあるし、学校教育法もある。学習指導要領もあれば、大学設置基準もある。法律でいろんなことが決められているし、教育のガイドラインもある。

「考えて判断できる人間を育てる」という教育の役割は一緒なんだよね。だから、私学が行う教育についても、国や自治体が公的資金を投入し、担い手が国なのか、自治体なのか、私学なのかという違いがあるだけ。その多様性と独自性を重視するというのが、人類が到達した教育のあり方だと思っています。「金を出した者の言うことを聞け」「権力を持つ者の言うことを聞け」というのは、どこの国であっても、いつの時代であっても、教育のあり方に反します。

*

「今回で最後にします。」

立命館守山高等学校の立ち上げの仕事をして、その一期生が卒業するのを見届ける前に、大学へ異動となりました。その後、立命館学生部の仕事をして、六〇歳で定年になりました。定年後は再び立命館守山高等学校に戻り、入試担当として、入試広報やパンフレット制作、生徒募集をしたりと四年間仕事をしました。その後は、病気で体調を崩し、自分

から「辞めます」と伝えて、退きました。私たち創設に関わった人間が、いつまでも学校に居続けると、かえって悪影響も出てきます。

学校の中で困ったり、判断に迷ったとき、そういう人に相談にいくでしょう。それは良い面もあるけど、同時に害にもなる。だから、そういう人は、もうおらん方がええと。今、現に学校にいて、責任を持っている人たちが、学校を創っていくべきだとも思います。

今回の取材についても、話をしようか本当に迷いました。でも、「これで学校に関わるのは最後にしよう」と決めて、話をすることにしました。

*

—今日はありがとうございました。貴重なお話が聞けました。最後に二人で写真を撮りたいです。

じゃあ、せっかくだし、学校で写真を撮ろうか。

(守山市民ホールから立命館守山中学・高等学校に移動)

パシャ。

作品が完成したら、見せてね。

—はい。

部活も勉強も、頑張つてね。

—頑張ります。今日は本当に、ありがとうございました。

【参考資料】

- ・文部科学省「令和六年度学校基本統計」
- ・文部科学省「令和五年度国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」

【感想】

今回の取材を通して、普段何気なく通っている学校が、多くの人々の想いによって築かれてきたことを知り、大きな驚きと感動を覚えました。学校を創るということは簡単なことではなく、多くの困難を乗り越え、地域の未来を思う強い想いがあるからこそ実現したのだと実感しました。これからは、そのような歴史や想いに支えられていることを忘れずに、日々の学校での学びを大切にしていきたいと思います。



左：語り手 北田正知さん
右：聞き手 関口陽彩